

2011 年度・研究旅行奨励制度

◆研究旅行計画書

研究テーマ	ムーミンへ託された思いーカリカチュアから児童文学へー	
目的地	国名	地域・都市名
	フィンランド	ヘルシンキ・ナンタリ・タンペレ

研究旅行の目的

世界中の誰もが知っているキャラクターの「ムーミン」。

ムーミンと言えば児童文学やアニメで知られ、魅力的な物語とその愛らしい姿で多くの人の心を捉えている。一般的に子供向けだと思われがちだが、よく知られているその姿からは想像できない「黒いムーミントロール」という一枚の絵がある。作者のトーヴェ・ヤンソンはヒトラー政権時代のドイツを訪れた時に、迫りくるナチズムを表現していると言われてこの絵を描いた。この当時フィンランドは内戦や、ナチスドイツとソ連の脅威にさらされていた。多くの戦争を経験したトーヴェは、風刺画家として活躍した、カリカチュア雑誌「ガルム」上で小さなムーミントロールを自分の分身とし、カリカチュアによって直接的に自身の言葉では伝えることのできない思いを託したのではないだろうか。ムーミンのこの2つの顔を知らなかった私たちにとって、この一枚の絵との出会いは衝撃的であった。当初はカリカチュアに小さく描かれていたムーミンが、時代と共に児童文学として現れるようになった推移や意味を考察するために博物館やアトリエを訪れる。また何故カリカチュアとしてムーミンが誕生したのか、図書館や軍事博物館に行き、激動の時代を送っていたフィンランドの歴史背景から探る。一人は児童文学への展開、もう一人は歴史から見るカリカチュアをそれぞれ調べる。そしてお互いが調査したそれらを踏まえて、カリカチュアと児童文学という二つの観点から、トーヴェが自分の分身である、ムーミンに託した思いとは何なのかを考える。夏の短い期間でしか訪れることのできない施設もあり、この時期だからこそ行く価値があると思う。

期待される成果

フィンランドに残されたトーヴェ・ヤンソンの足跡をたどることにより、日本ではなかなか見ることのできない原画や、「ガルム」時代の貴重な資料を実際に目にし、本物の絵から伝わってくる作者の真意を読み取り、この旅行のテーマである「ムーミンへ託した作者の思い」を考察することができる。そして、児童文学だけでなく、カリカチュアとして戦争に批判的なムーミンの新たな一面を発見することができ、「大人も楽しめる児童文学」というこの作品に対してより一層の理解を深めることによって、今の世の中にも通じるものを感じ取ることができる。また、博物館や戦争遺物を見ることで、フィンランドの歴史や戦争について学び、さらにナチスドイツの影響が強かったフィンランドへの理解を深めることにより、他国から見たドイツという視点で、ドイツゼミで学ぶ私たちのこれからの研究テーマの視野を広げることができると思う。二人で役割を分担して調査することによって、自分が受け持ったテーマに対して責任を持つことになり、またお互いの意見を交換することにより、自分の考えをさらに深め、それぞれの答えを導き出すことができる。これからレポートや卒論を書く際に役立つと思われる。

◆研究旅行・予定表

出発予定日	2011年 8月 21日	旅行予定日数	13 日間
帰着予定日	2011年 9月 2日		
	滞在地	行動・調査内容	
第1日目 21日(日)	福岡 バンコク	移動(飛行機): 福岡→バンコク(乗り継ぎ)	
第2日目 22日(月)	バンコク ストックホルム	バンコク 1:10 発→ストックホルム 7:00 着	
第3日目 23日(火)	ストックホルム トゥルク	移動(船): スtockホルム→トゥルク シリヤライン乗船	
第4日目 24日(水)	トゥルク ナーンタリ	移動: トゥルク→ナーンタリ (バス移動) ムーミンワールド(児童文学としての面を調査)	
第5日目 25日(木)	トゥルク タンペレ	午前 ナーンタリ→タンペレ 午後 レーニン博物館(ソ連との関係を調査)	
第6日目 26日(金)	タンペレ	ムーミン谷博物館(原画やカリカチュア鑑賞) タンペレ図書館(資料の収集)	
第7日目 27日(土)	タンペレ ヘルシンキ	移動: タンペレ→ヘルシンキ (列車移動)	
第8日目 28日(日)	ヘルシンキ	スオメンリンナ(軍事要塞見学) *フェリーで約 20分	
第9日目 29日(月)	ヘルシンキ	午前 フィンランド軍事博物館(戦時中のフィンランドを調査) 午後 市庁舎の壁画、アトリエ見学 シリヤライン船舶	
第10日目 30日(火)	ヘルシンキ ストックホルム	移動(船): ヘルシンキ→ストックホルム 9:30 到着	
第11日目 31日(水)	ストックホルム バンコク	移動(飛行機): スtockホルム→バンコク	
第12日目 1日(木)	バンコク早到着	バンコク 6:50 着	
第13日目 2日(金)	バンコク 福岡	移動(飛行機): 福岡 8:00 着	

カリカチュアに託した作者の想い

—激動の時代のフィンランド—

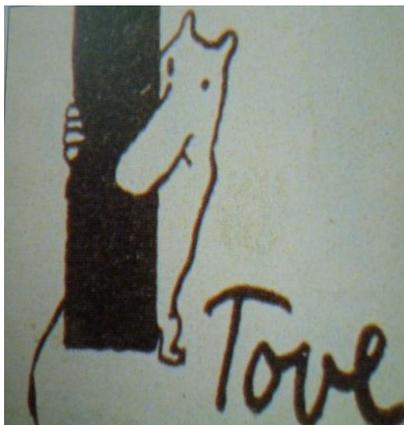
はじめに

世界中で愛されているムーミン。だがムーミンはカリカチュア誌『ガルム』で姿を現した。なぜムーミンは風刺画として誕生したのだろうか？博物館や資料館、歴史的遺跡を訪れ、私は激動の時代を送っていたフィンランドの歴史背景をもとに、これらの理由を探っていくことにした。

激動の時代のフィンランド

ムーミンがカリカチュアとして登場したのはいつ頃なのだろうか？この頃フィンランドでは一体何が起きていたのかを、手に入れた資料などを元に簡単に年表にまとめてみる。

-
- 1914 作者トーヴェ・ヤンソン誕生
第一次世界大戦勃発
 - 1918 フィンランドで内戦がおこる、ドイツ軍がヘルシンキを制する
 - 1919 第一次世界大戦終了、フィンランド共和国の誕生
 - 1920 フィンランド、ソヴィエトと休戦
 - 1923 カリカチュア誌『ガルム』誕生
 - 1933 ヒトラーの政権掌握
 - 1939 ソヴィエト軍がフィンランドを攻撃し、冬戦争に突入する
 - 1941 トイツ軍がソヴィエトを攻撃し、ソヴィエトがフィンランドを攻撃する
フィンランドはソヴィエトに宣戦布告。継続戦争が始まる
 - 1943 『ガルム』でスノーク(ムーミンらしきもの)が登場する
 - 1944 トイツ軍相手にラップランド戦争
 - 1945 第二次世界大戦終了。フィンランドはソヴィエトと戦ったので敗戦国となる
-



地図的にソヴィエトとナチスドイツに挟まれたフィンランドは作者のトーヴェ・ヤンソンが誕生したこの時代、政治や戦争で大きく揺れ動いていた。作者がこの時に見て、体験したことはムーミンに大きな影響を与えているのではないかということ的前提にフィンランドとロシア、ドイツの歴史的関係を考え、実際に調査することにした。

←トーヴェの署名の横に書かれたムーミンの前身

海上要塞スオメンリンナ

フィンランドのヘルシンキから船で行けるスオメンリンナ海上要塞は世界文化遺産に登録されている。ここはフィンランドがまだスウェーデン王国の一部であった1748年に完成した。ロシア帝国に対して守りを固めるために造られたこの要塞の、島に存在する大砲は西側であるロシアに砲口が向いている。ロシア領として駐屯地となったり、ロシア革命に対する軍事反乱、第二次世界大戦の軍事基地などこの要塞は様々な役割を行っていたらしい。



私たちがスオメンリンナに行った時は天気がとてもよく日曜日だったこともあり、多くの家族連れが訪れていた。私たちは地形的に見るフィンランドとロシアの関係を調べるためにこの要塞を訪れたのだが、多くの方はピクニックを楽しんでいた。この島には多くの緑や、カフェ・レストランもあり、市民の憩いの場として人気があるので自分が要塞にいると言う事を忘れそうになるが、あちらこちらに大砲や銃弾の跡などがそのまま残っていてスウェーデン・フィンランド・ロシアの地理的位置や力関係を体感することができた。



レーニン博物館



今回の研究旅行で私たちは、フィンランドの歴史を学ぶためにタンペレにある世界で唯一のレーニン博物館に行ってきた。ここタンペレでは、工業が発達しており労働階級の人々が多く働いていて、共産主義・社会主義運動の中心ともなったようだ。フィンランド国内最大の内戦が場所であり、ソヴィエトとの関係が深い都市である。

レーニン博物館はこじんまりとした博物館であったが、世界で唯一と言うだけあって多くの写真や彼の持ち物などが展示され、当時のフィンランドとソヴィエトとの窺い知ることができた。

日本語で書かれた展示物の解説本も館内に置いてあり、人も少なかったのでゆっくりと見てまわることができた。



館内にあった資料によると、ラヂミル・イリーチ・レーニンは1905年11月から1907年の12月までのほぼ2年間フィンランドに住んでいた。革命家であった彼は政府に政治犯として指名手配され、国から追放されていた。レーニンはソヴィエトのフィンランドに対する政治的な圧迫に注目し、小さな国の怒れる国民たちは皇帝反対運動に大きな力を貸すことになると考え、フィンランドの独立を訴えていた。そしてレーニンの政治的方針に基づいてソヴィエトは1917年12月31日に世界で初めてフィンランドの独立を認めたとのことだ。

フィンランドは独立すると、共産主義の赤軍が反乱。レーニンは赤軍を援助するが反対勢力の白軍は第一次世界大戦でロシアと対立していたドイツ帝国が支援し、フィンランドでは内乱が勃発する。白軍が勝利し赤軍を制することでこのタンペレにおいて内乱は終了した。そしてこれによりフィンランドは「白い恐怖」の時期が始まったとのことだった。

レーニンについてどちらかというとマイナスの印象を持っており、当時のフィンランド人もそうなのだと勝手に思い込んでいたのだが、この博物館では独立を導いてくれた人としてプラスに捉えていたように思える。もちろん様々な立場や見方があり、一方の偏った立場から物を言う事はできないので一言でレーニンが良いとは言えないが、実際にこうしてフィンランドを訪れることで現地での受け止め方に気付くことができた。

まとめ

フィンランドとロシアとドイツは複雑な関係で成り立っており、フィンランドはロシアとドイツの影響を大きく受け続けていた。様々な規制がかかり日常生活を脅かす戦争の影は風刺画家としてのトーヴェ・ヤンソンにも多大な影響を与えた。若き画学生であったトーヴェが、ナチズムやファシズムが全盛のころのドイツをはじめ、ヨーロッパの各地を旅をして戦争の恐ろしさを間近で体験し、帰国した後に政治カリカチュアが『ガルム』に多く登場している。言論の自由を規制される中でも、トーヴェはカリカチュアを描くという自分にできる方法で戦争と戦ったのではないだろうか？



ヒトラーの姿が見れるカリカチュア

そして自分の気持ちを代弁するものとして、現在の可愛らしいムーミンではなく、仏面顔の生き物であるムーミンが風刺画の中に登場したのであろう。戦争が終わったあとぐらいから、ムーミンは少しずつ現在の様な姿に形を変えていき、今では児童文学として子供から大人まで愛されるキャラクターとなっている。児童文学としてのムーミンだが、そのストーリーはどこか影めいている部分もあり、原爆や地球温暖化、核について訴えている内容ともとれる。子供だけでなく大人にもぜひ読んでほしい作品だ。

研究旅行奨励制度を終えて

私はフィンランドの歴史背景からカリカチュアとしてのムーミンについて調べたが、激動の時代を送ったフィンランドとドイツ、ロシアの関係は密接なものであり、歴史と言うのは本でも学べるものではあるが、やはり実際に現地に行くことでその土地の人の考え方や環境、地理的要因など多くの事を学ぶことができた。フィンランドの人々は親切な人がとても多く道に迷った時などに笑顔で助けてくれて、現地の人々の優しさにも触れ合う事が出来た。森や湖などの自然豊かで美しいフィンランドを愛したトーヴェが、ムーミンへ託した平和へのメッセージを忘れることのないようにしようと思う。

——今回の研究旅行奨励制度に行くにあたって、ご協力頂いた先生方、旅で出会った現地の方々、そして素敵な作品を残してくれた作者のトーヴェに心から感謝いたします。有難うございました。

参考文献

- 『トーヴェ・ヤンソンとガルムの世界』 富原真弓著 青土社
- 『フィンランドの歴史』 ディヴィッド・カービー著 百瀬宏、石野裕子監訳 明石書店
- 『Dancing MOOMINVALLEY』 Bulls, Moomin Characters Ltd. Tampere Art Museum Moominvalley
- 『Sagans öar』 Tammerfors konstmuseum Mumindalen

カリカチュアから児童文学へ ～ムーミンの変化～

1. はじめに

私はムーミンに託された作者の思いを読み取る上で、カリカチュアに小さく描かれていたムーミンが、画の中で姿の変化と共に段々とその存在が大きくなっていき、児童文学として現れるようになった推移や意味を考察していく。

2. 考察

ムーミンの誕生はトーヴェ自身が語るに、彼女の弟を怖がらせるために家の壁に考えうる限りの恐ろしい生き物を描いたのが始まりだという。私たちはそんなトーヴェの描いた原画を見ることのできる、タンペレ市立美術館ムーミン谷博物館を訪れた。この博物館はタンペレ市の図書館の地下にあり、トーヴェの寄贈した約 2000 点に及ぶ原画や挿絵、トゥーリッキ・ピエティラによる立体模型が展示されている。館内は残念ながら撮影禁止だったために、博物館で得た資料を記載する。

● トーヴェ・ヤンソン

スウェーデン系フィンランド人であり、画学生時代はスウェーデン、フランス、イタリアなどに留学していた。その後母シグネも携わっていた諷刺雑誌「ガルム」で活躍するようになる。そして世界中で愛されることとなるムーミンシリーズを手掛ける。あまり知られていないが、画家としてフレスコ画など多くの作品を残している。また、小説家としても大人向けの小説を書いている。

● ガルム

1933 年創刊の諷刺雑誌。この時のフィンランドは独立宣言から数年がたったが、その後内戦、言語闘争、第一次大戦、冬戦争、継続戦争、第二次大戦と数多くの戦争を経験することとなる。そして「ガルム」は「北欧主義」「自由と民主主義」「反独裁」をスローガンに 30 年に渡って政治諷刺の最前線に立っていた。ムーミンの誕生は前述の通りだが、「ムーミントロール」が今の姿へと進化していったのは、ガルム内であったといえる。



軍事要塞であったスオメンリンナには今も大砲などが残されており、戦争当時の様子を伺うことができる。今は世界遺産になっており観光スポットにもなっている。

ムーミンの移り変わり



1934年に描かれた水彩画「黒いムーミントロール」。ヒトラーが全権を掌握し始めた頃に伯母のいるドイツへ行った後に描かれている。その頃には田舎の小さな村にもナチスの影は忍び寄ってきており、思ったことを口にできなくなっていた。トーヴェはこの絵の詳細について語っていないが、私はこの黒いムーミンから「恐怖」や「不安」を感じ、それはトーヴェの心境そのものだったのではないかと思う。

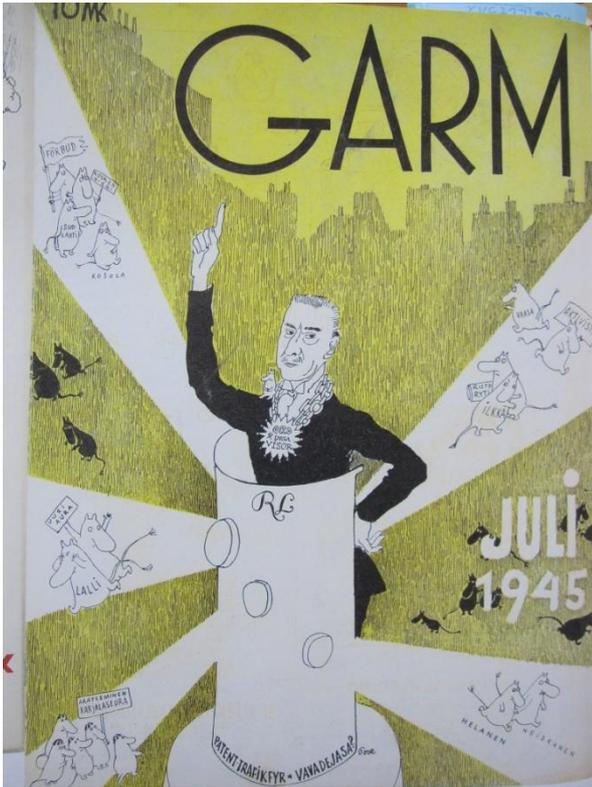
1943年「悪夢のなかの生き物」

左端にムーミンによく似た姿の「スノーク」と名札を付けた生き物がいる。ここではムーミンとは違う存在として扱われる。元々恐ろしい生き物を描こうとして生まれたムーミンの中の、「恐ろしい」部分を前面に押し出しているのかもしれない。児童文学にもスノーク族として、ムーミン族とは違うものとして描かれている。

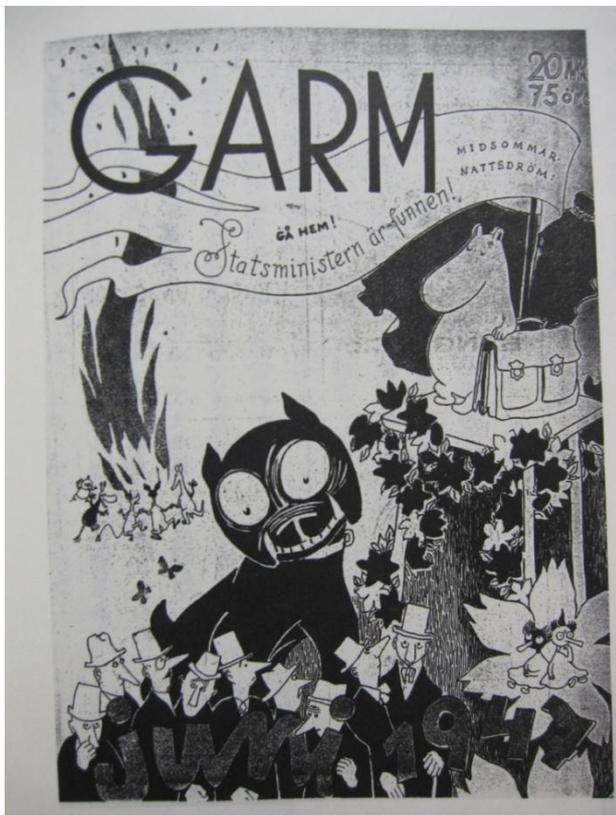


1944年「ラップランドを掠奪するヒトラー」

このころから作者のサインの横にムーミンが小さく現れるようになる。目は小さく鼻は長くて、今日見られるような可愛いムーミンとはかけ離れている。ラップランドを荒らすヒトラー＝ドイツ軍を不安そうに見ているのが印象的である。

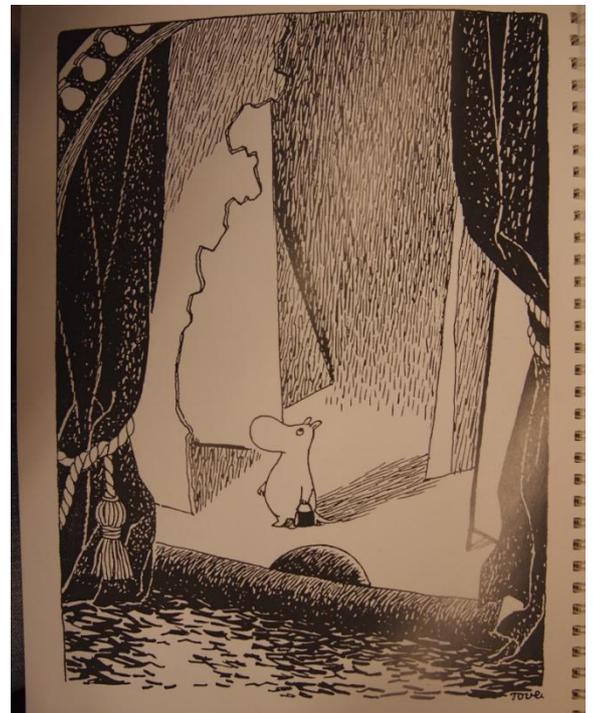


1945年に描かれたこの表紙には、署名の横にちょこんと描かれているのではなく、小さいながらも数多くのムーミンが登場している。姿は未だ今のムーミンとは少し違っているが、今度は表情だけで訴えるのではなく、プラカードのようなものを持って、意思をはっきりと表している。中央の人物が諷刺されており、周りのムーミン達はそれに反抗しているようなので、作者の言いたいことを、ムーミン達が代弁しているように見える。



1947年のガルムの表紙でついに、「主役」の一人としてムーミンが登場する。黒犬のガルムと並んでこれまでにないサイズで存在を主張している。この時にはもう「ムーミントロールと大きな洪水」と「ムーミン谷の彗星」の二冊が刊行されており、徐々にムーミンが児童文学の主人公として認知されていっていたと思われる。この頃にはすでに今のムーミンに近い姿をしている。

初めに描かれたムーミンは鼻も長く、目は小さく無愛想な顔をしていた。ガルムに描かれていた当時のムーミンは特に、醜い生き物として諷刺画の中で、戦時中ということもあり、検閲の目を潜り抜けて、見る人の気持ちを代弁したり、作者の思いを表したりと、段々とその存在感を増して



いった。児童書として挿絵で登場した当初も、あまりかわいいといえる姿ではなかった。最初の作品である「小さなトロールと大きな洪水」は戦後間もなくの1945年の12月に出版されている。その後ムーミンシリーズが進むにつれ、ムーミン達は徐々に初期の醜い姿から、より親しみやすい丸みを帯びた姿へと変化をみせてゆく。ムーミンの鼻はより短くなり、目は大きく低い位置になることにより表現の豊かさが加わり、より人情味あふれる表情を持つようになっていった。この変化はムーミンが児童文学で単に子ども向けゆえに、より可愛らしく描かれたという訳ではないように思える。ムーミンシリーズには平和な日常の生活の営みと、作者の戦争体験からくる恐怖や不安も描かれている。実際にトーヴェの弟や友人は戦争に向かい負傷したりしている。そんな時期に描かれたムーミンは、仏頂面で険しい表情をしており、戦争に批判的な作者の心情を如実に表していると思う。戦後のようやく落ち着いた環境から、今の愛らしいムーミンが生まれたのかもしれない。

3. まとめ

今回夏の間しか開いていない「ムーミンワールド」も訪れた。ムーミン達の世界観が、一つの島を使ってそのまま再現されているテーマパークである。周りを湖に囲まれており、自然をそのまま残したパーク内にはムーミンの家などが建っており、多くの家族連れでにぎわっていた。このムーミンワールドができた時に、トーヴェはとても喜んだそう。暗い雰囲気は全くなく、子どもたちがのびのび遊ぶことのできるこの空間がお気に入りだったという。私はムーミンワールドへ行きトーヴェは、この子どもたちの笑顔で溢れた「平和な未来」を思い描きながらムーミンを描き



続けていたのではないかと思った。戦争を批判する諷刺画を描いている時も、どこか影のある児童文学を書いている時も、いつか来る平和な時代を夢見、思いを込めていたのではないだろうかと思った。

4. 感想

この旅行でのムーミン研究を通して、フィンランドの戦争の歴史を学び、体感することができ、当時の作者の心情をより想像することができた。予定していたアトリエに現在は入れなくなっていた事が残念だったが、博物館では多くの原画を目にすることができ、貴重な体験をすることができた。

ご協力、ご指南して頂いた先生方、本当に有難うございました。



* 参考文献

「ムーミン谷博物館 20周年記念誌」2006年、タンペレ市立美術館ムーミン博物館

「トーヴェ・ヤンソンとガルムの世界」2009年、富原真弓、青土社